東雅　十

東雅巻之十七

禽鳥第十七

雞 ニハツトリ 日本紀に天照大神天石窟に入給ひしに時思兼神常世の長鳴鳥を聚めて鳴しめらるといふ事見えしは 田鳥也 日本紀私記に鶏をいふといへり いはゆる下して御ものにはニハツトリといひ新撰に鳴なとゆひしあるなし 日本紀に雄鶏 ユウツケ

東雅巻之十七

禽鳥第十七

雞 ニハツトリ 日本紀天照大神ニ坐ス時ノ條ニ思ヒ兼ネ

し時思兼神常世長鳴鳥を聚めて鳴し

めしといふ事見えしは 旧事古事記日本紀等には 鶏といふ

いひ倭名鈔にはニハツトリといふ 説文ニ鶏

なほといひし なほ之し 一則 木綿付(ユウツケ)鳥

なまじひしも時なかりやよりなかりし
世のさかしき時の祭祀にまれなりといふハ
古学の源まそのちにいひ出しけるを　又是て
よれ従ふ人數の序を構し給ふれバからひ
しも書き遺して万葉集に歌の序を譲て
カケといひしハ東西方言いふを仮字を掛ていハ
カケといふ帰妻小にあていハれとみえたり
古歌にカケロと帰すて論しおきたる事し

古の語を編集せりて和名抄ひとつ有
ありそはみえたり　家語の字譜てカケと
いふすへて凡そ集はせりめれと古れ
方語の言をそれの字に寄すへし
集あるへしとも私のもの候て
倭名抄は小語と義をたのみて
より遺漏ある事もあるへきかと脱字もありけり
又や其その今語に名称辞まりて名づけ
よみそのまし
なり

雉キジ倭名抄に廣雅を引て雉はきゝす一に
きじといふ野雞也と注せり日本紀に雉を
なゝしきじにて此書紀の中ツ巻に天ノ稚彦（ワカヒコ）を
天照しのかみしれて三年になるまでかへりこて
中されハ無名雉を遣はして其由を
問ひしとし雉名鳴女と注かはされ給て
とかへりて 四年古事 日本紀あれ 日本紀にみえし 記には

雉をはきゞすとも云りきゞすとはきゞすといひし

しる物なりけり四時に通用せり　藻塩草に

きゞすといふ季の詞　けふの名古屋にて　喜哉までに謡す次郎

今謡に用ゆるのみこそきゞすといふなりと

古の遠き世よりふハきゞすとはきゞすといふ説の物也

よてきゞすといひしにけるの秋の　まゐ地理志ば

雨の五月に常しきといひしと云ふ也

別て山鶏はマドリと云し　事本朝

食鑑なり鷸雉一則には山雉といふ雉は居

一京師ハ居ニ山林ノ趣ヲ得ニ山居ともいへしかの郎
誹之
倭名鈔ニ七巻食經を引て山鶏一名鶏鶏
山雉雅記春呂とよんて甚りく雲あ菓ニ山
雉有四種色同物異也と見えたりそれゆ中鶏雉といふ
即錦雉といふ乃濃地より来りあり無本ニ山鶏とは
書く

雉ハト日雉云ふ本雉無石雉雉も雉とも華
京中國ニ住かいさ候しに此雉雉も候り
来りて雲南至南とよんて留りてかつ〻從

詠の姿律といひは言葉長短によつて古調は
結まく四月詠ずるなり即ち心姿細妙と
作りは加へ能くあるく親りあ記するは速さ
萬葉とみてけり こゝに於て作すの速さなれいふと
みてけり優名錦字あ論なる字山崖名錦集
短歌名花浪字とはき能はやてバトは多く撰れ
志多能こそ於く錦はへバとといせり

まゝ食鶏を以て　鶍ハイカルガ良似鶍而
白喙黄く兼花鳥大斑鳩如角大尾
頷青く日本紀私記に謂しことと同し
とありイカルカノ事を詳　日本紀に斑鳩読てイカルカといふ
鶍字中詳ならねはわか國集に鶍は豆まはり（ヒメウヽトリ）と
ほしかり食鶏兼花鳥等に見えし本のことく
わか國集の説にあはしやされと豆まはしといふ
名は雑名にあそりして臘嘴名諸てアトリといへ
あのに似たりとしわか國集に本に擇むかも
臘嘴名といふもの別にこれ一物なり鶏班鳥也は

ヤニハトハ青鷺なりとイヘハトは海鷺子別ニ鵁鶄なり
ツチハトハ斑鳩なりといふとしまき斑鳩の子
にうしものは斑隹とも錦鳩ともいひて此の絵ツチバト
といふものハ斑鳩なり

鴈

カリ 天稚彦の死をいたみ河鴈鷺ね婦る
雚雉鷺鴈鳩なとして荒のこ須しも
とふこのゆかりの記古事記日本紀等ニ有
みつくり見天稚彦の家ゆゐもしきて葬くれ
鴎の絵りとみえてれを 或人
旧説 古き絵れひ

つゐし示くのことしそ月しこ阿ねそ山れ
らの字此名語ま書候まゝて書来りひ
し示の義のことく今に得候も是
しぬ多かり何を言ふそのことく小を
罷(ツナ)まかりとしてむ出ありきのこゝろあり
まふ他語より亀雁のまるとして其の名に
つゝて蹄學もわも云洋カりといふ仏学

乃御代に茨田の堤に子うむと御歌
賜りて武内宿祢に問はせたまひし返歌
奉りし事みえたり手纏日出す
見えし歌のうちカリカリとしもよめる人
みえたりしにちかき世のことは　仁徳天皇の御歌も　武内宿祢の歌も
カリとよみて哥とカハカリといふ二ツにいまて
みえしハカリといふの外　三ツのぬれや詳すれ外人の
詩にカリといふハカヘりやカヘりとは何くとするカれと
いふも萬葉集の歌りみえておもきを野取えてと

ゆりあふの傍に生ひてキヨモリなといふなるを
河つらに生殖して水辺ならぬにはあまた清生して
いつくといふさうらも古語に奥山に水ある所に
読し水なるといへるの類や深山にあるを
生しと見え
しるす

雀

スヽメ　古事記に天若彦の葬ありしは
雀を碓女（ウスメ）とすとしるしといふ事あり　スヾメ
とはウスメといふ名の轉せしなりけれとも
田舎には碓舂女（ウスヽキメ）と書かれ日本紀には舂

女とも見てハかしこしと綿の雨
つらねとみえたり取をみことは猿サと
いふつらしきふしきいてきて小しきと
いはしもきこへつすメといひつハ古俗
の名將ひてメといひしをくれつれ
鶴とヒメといひ粥をシメといひ鷗をカモメ
といひ燕をツハクラメといひナかセとよく

鷦

鷦鷯サヾキ伝名おほ鷦鷯はサヾキ少なくと
注せり古語に細小して細かなるを楔といひ
さりきとは古語なるを呼ひし語なしとも云へ
る鐸語をサキといひ揺るをツキといひ語るを
ミキといひ騒るをカマグキといひしなるべ
是より那乃名にミソサヾイといふ付し
ミソといふも細小なるをまねいひしなるべし

寉の字ミツヤと讀むも細寉成
みえたり　之の字集にけるに葦に挿り三界
なつなるにミツサヽナリと以ふこゝろしこれは鳥府
の倭名も見えたり俗に四十カラとよべるの
わやしサヾキニミツノ名あるはなれる事也ミツハ三十
といふなり

また讀名おほく兼名苑の註として巧婦
はタクミドリ好剋ニ葦渡ニ食中蟲ニ故亦
名ニ葦原と云しより　またしく和の
ことにいは鷦鷯とも巧婦ともいふなれと尓雅

方言に曰 東國にて笄にかへる巧婦と
いふは鷦鷯の一名にて巧婦といふは未條
撰傳の半巧婦なるをいひし之好剖葦
とのは鷦鷯といふとのことにて鷦鷯類なるべし
爾雅に桃蟲鷦其雌鴱とみえし注に鷦鷯は桃雀也
俗呼為巧婦とみへたる[illegible]鷯剖葦とみえし注に
好剖葦皮食其中蟲因名云江東呼蘆虎似
雀青班長尾とみえたりましいはすくらく鷦鷯に
比すれば[illegible]京に爾雅注に見へし雨にもよりて剖
葦とは鷦鷯とすべし少け兼名苑注のこときには

いひし別に義ありしと
今は知りてはあり難し

烏

カラス倭名抄に爾雅唐韻纂名苑等に
訓て烏一名鵶カラスとありし萬葉集
にカラスとはクロシといふ詞の略なりと
見えたり卵や俗にホクカラスといふ烏也
ハシフトカラスといふは鵜やハシフトとは大嘴烏
巨嘴烏あると見えし也けり

木兎ツク日本記私記ニ鵂鶹訓豆久此邪ニ木兎ツク

名く木兎は多く世ニ都久と云

まり日本記ニは仁徳天皇の生給

ひし時木兎産殿ニ入しよ見えし

女也ハ之ツクの事ハ委詳緒忝所也

介雅注ニ引て木兎ハツク也云々ツク

似鶹而小兎頭毛角有く見ゆまる

梟はフクロフ之属にサケといふ鵂鶹は漢
語なりイヒトヨといふことみえたり日本紀
休留を豊大臣の宅倉に子うむと書せり
訓せられ休留は茅鴟と注されたり
と和名にハイヒトヨは梟の異名にて雅有
古く雅して皆梟ノ類にして悪鳥の名
にて見えたりサケといひイヒトヨといふかたきに詳

尓雅にみえたる萑鴟は鴟鵂之と見へ又怪鴟老兎角鴟等の名あり東璧か本草によるに[illegible]二種あり鴟鵂は大和鴟鵋䳢頭目如猫有毛角兩耳晝伏夜出るものは即木兎之一種鵂鶹大如鴝鵒毛色如鷂頭目亦如猫といへるはすなはち萑鴟に是に似たり皆鴟類なれとも梟一名鴟といふもの即梟鴟即今俗訓佐幸胡布梟好而長醜惡状如母雞有斑文頭如鴝鵒目如猫目その名自作と東璧か本草に従ひしそのすなはち梟之訓りしても四説あり梟のわさうた何の名とカホヨトリといふといひ亦俗にフクロフとは己か名をよふ也なといふことも東璧か説ノ本合へり木兎とツクといふはツは角をいひ毛角の角のことなるといへるしなる無しツといひしより都に従ひサケとは

音韻のあやまりなるへし　叫字読てサケ
フといふもは義之フクロフとはまちかへなる
ともそて名とせしにて呼わたし　イヒトヨの義ら詳し
又倭名鈔に怪鴟　漢語抄ホヨタカといふとみへし
しまさければ
なるへし

桃
花鳥　ツキ　日本紀小桃花名読て　ツキと
いへり　倭名鈔にハ玉篇をひきて　鴟ハ
ツキ　赤啄自呼之鳥也　揚氏漢語抄ハ
紅鶴名之同し　俗用鴟字　未詳

と見せり鵡の字に雅に鸚鵡と云ふハみな
ふれと決してツキと云ふ事とは見えん
おの鸚鵡の別なるなり 楊氏かいひし紅鸚ハ食物亦菓
に紅鸚ハ鸚鵡にして大紅嘴猶不謂
朱鸚是くとみへしその形安く図せり
桃花鳥とおもハれしハ我朝の方言にし
も有之りしハ鵡の字のことにハ神木に伝

釗道云ヘリ 所すへしツキハ乃氣ニ祥
ましい 信ヲトキといひしハ古説の悞なり
雅の字 年ふ以ふにあるハ詩経ニみえし雅之
ともいふ説あり 雅は本信ニ鄙雁といふものゝ紀雅こ
ハあらぬ

鵙

モズ 倭名抄ニ 薬名花として鵙一名鶪
伯労也 日本紀私記ニ 百舌といふと揚
氏漢語抄ニ 伯労ハモズ一名ヲ鵙といふと

注せり鵙ハ即今いふモズ之日本紀ニ百舌
なと書たれハ其字を借りて読て
モズとせられしにて正訓とは見えずモスの
義ハ詳ならず　舜水朱氏モズを見て鶪といひ百舌
とモズといふは非なりといへり
呉元化毛詩鳥獣草木疏ニ鵙似鶷鶡而大性
好草棲毛羽灰色黒眉鷹觜能捕燕雀伯趙
氏曰至伯趙鳴といへり此説のごとくハ似ニ
鵙と読てモスといふもの尓非ず其の鶷鶡といふ
ものは百舌とも反舌ともいふ之を紛らはしくて
百舌とモズとせしハ誤也

鷸

シギ 田にすむ鳥 鷸(シギ) 山鷸沙鷸(ヤマシギ サツシギ)なと見えしか

古事記には志藝山津見の神あり日本紀

には鴫と記によりて鷸字をシキとよむと

信せられたり又聖武天皇大佛開眼

椙を刺のいて御筆と営れしつゐ附

内御歌にとけるのすとハ讀のいより

ぐり倭名鈔には玉篇を引て説也

也漢語抄にはミギ一川に田名とみえ
須しあり後借田なりし名なれは字劍
造りて讀てミキといへは楊氏の説なれは
之ミキの義に釋蒙抄集抄の古説に
ミキといひしは解しといへは調之とみゆれ
四月謂は館にとみえしも據はさけやて
といふてくはまうらしに整ふれはし

しぎ鷸の字を傳ありて志るしあらはし
されど又草字より鷸無二ききと
爲遠けしに鸜の義有りと志るあら
せ四語す古歌すしぎの名ゆきこそ
かうとりは暁のすゞ志けさ斗り
諺りとみえたり　藻はしきしとしぎとは
草字
こちね音の聲さえよれりまそれ

一名にして二おほりなり寒水鶏一二説分
ら次より後かつきまとあれどきしいまも
橘氏説の田ここと取しあらしも我らの二方こ
取り譬説てことさとしふた
ことさらしも被とあれ

護田鳥

護田鳥ソスメトリ倭名鈔に尓雅集注と
いふ語一名澤虞即護田鳥之常在
澤中見人輙鳴有似主守官故以名之
漢語抄小ソスメトリと注せりソスメ

乃薬之譯 後俗ウスヘといふはこれを轉略して

しく雕胡にウスヘウといふ名あるは書

文けるに似たりとしるすのみ 式人の説は

方目本草綱

目にみえたり 雕胡亦名澤虞濮周ともいふは

まこもといへるのなりといへり 本草和名といふ本の方目

のことにいはまこもに似てありとしるすのみなれと

まはこもといふは雕字の漢音を轉してよびしこと

古語拾遺に天鈿女命をウスメといひしは 古語に

ウスことといひしを畏くつきの前とけ命女命なれと

あやしき命なれはうくいひしことなりけり 古

俗語をよいてウスメともウスべともいひしいふるの

方目長一ミ前まやありけむされど此絵
み鷸の字を用ひてバンといふ名をあてへしかども
如何なれば鷸は鷭の一名也と見てより宗水
朱氏には此水かことといふの竹鷸に似たれども非也
竹鷸とヤニミキといふも亦非なりといふる漢
人此絵かゝれし竹鷸を見て宋朱氏説のことくなると
ありけり

水雞

水雞クヒナ日本紀に水鶏此クヒナといふと訓せ
られより倭名鈔には食蝗として龜
名ハクヒナ白ヽ似水鶏能食龜故以名之漢

睢鳩ミサゴ景行天皇東國に幸まして上總
の海より淡水門を渡りの時に覺賀鳥
の聲聞しとこゝろみそなはし給ひしとて
海中に出ましゝと日本紀に見えしと新し
て私記に安太夫の説にはミサゴ云々を據すとれ
高橋氏文にミサゴとあるてあらさるミカリガと
いはひミサゴといふ古事の名同しからぬ処

又カリガといふは東国の方言なりとぞ
ミサコといふ名義も未詳萬葉集
に水沙兒（ミサコ）とあるはいはゆる水沙際に
あるをもてかく名つけいひしとみへたり
倭名鈔には爾雅集注を引て雎鳩は
ミサコ鵰属也好在江邉山中亦食魚者
也とのせたり

鶺鴒ニハクナフリ唱ヲ記テ陰陽ニ排けると
見て人道のはしめとなりのひしとさへなれり
されは世上の名の花実しきよりされ
なすことのしあしされとまつくわゝりの
こゝには古事記給のいひつたへしに
ありされし下ここ書写すへことなと
あらは倭名鈔小字亦作二鶺鴒一ニハ

クナブリといふ日本紀私記ニトツキヲシ
ヘトリといふと注せり旧説ニハ二ハタヽキ
ともイシタヽキともツヽナハセトリとも又稲
負鳥ともいふとみえたる事 日本紀抄 兼倶卿 旧事
紀ニ此鳥を揺其首尾と云しを日本紀ニ
揺頭てタヽクといふとみえたり二ハタヽキとも
イシタヽキともいふて紀ハ即此鳥ニよりて

二ハクナブリといふも二ハタヽキといふなとく
るよしなれとすへて未詳なる月ハ志るし

鴨

カモ　海神の女豊玉姫命おもゆ可のしな
出ておはる緒のよし　此歌に瀛つ鳥
鴨著く島と讀のよし古事記日本紀に
みえたり其名のカモといふ義は聞えぬ
倭名鈔丹ハ爾雅注を引て鴨ハ野名曰

鳬家名曰鶩漢語抄に鳧鷖はカモ
といふとみへ鴨一名沈鳬似野而小背上
有文漢語抄にタカヘといふ郭璞方言
注に鸊鷉も野鳬小而好没水中と
みえしはニホといふを注せりニホトリは
仲哀天皇の御子忍熊王の歌にもみへたり
萬葉集にもニホ鳥尓保又カルといふと

思ひて伝へ称ホカルハ野鴨なりと思ふ

人ハ思ひ鴨なりしといふなりと見えたりしとタ

カヘニホカルなといふ義なり 未詳 此事未詳おぼつかなし

ありし野ハ野鴨乃 俗にアヒロといふもの也 ハカモといふ

ものなれと古よりけるに野鴨をカモと読むハ 神田の

方言之鴨はかもとタカヘといひて此鳥の類之鶩

鶩のことハ揚子方言によれハ此鳥を小而好没

水中者也といふしるす 古ニホといひ 俗ニイヨ

メともカイツフリともいふもの大者謂之鸊鷉とみ

えしハ韓保昇か説ニ野鴨といふもの即今俗

ニイフ小鴨といふものとみえたり 集水 集氏は鳥は

渋といふてカモ之飛鳧 水鳧 水鴨 野鴨古同し頭皮
しいろ々赤毛あり或は黒頭ハ巻あるもあり
黄足あれと漂鴨ともいふ漂水鳥なるといふなり
小胡鴨はコガモ寒鴨はクロガモといふといひしなり
もろ種類あれば多くして此の鳥を称しも名多り
カモの類今せられしものタカベニホ京同しニホとは湖と
いひぬもハニホトリとは湖中水わたの類にあそび
アヒルとはアを略せヒルは潤せ其の潤あるを
いひしとみえたりイヨメといふはニホメの略なりしや
カイツフリといふは京畿の俗カイといふなと云
といふもしツブリとは其の水に没する意なれ
ふとりいひし俗の字を用ひニホと読むは我
邦の俗創造ありし所と
見えたりけり

鷗

カモメ萬葉集にハ加萬目とありて
カモメと讀ミまた野妻とありてカモメと
讀たりカモメといひカモメといふ只ハまた讀れ
惜しきと思はぬとも見ゆれハカモメといふ
義のことはいふ譯　カモメとはもはら野妻の義にて野のことにして
小さきをいひし
なるべし　又これありて小なるをいひ
一説集りのをそ多とよめばわれの名ハ

一思而孫啟名匠名也漢語抄ニ鸂鶒
と云を注せり陳蔵器本草ニ
よるに紫ふ小にいふ之名即鸂鶒之楊
氏か説のことしされど唐人の詩ニ
紫鴛鴦と賦せしけれハ鴛鴦也
字用ひたりともあるべしとあれハいふ
とふ家か詳

篠水朱氏をといふは鸂鶒之は
也而して鴛鴦とはをしあり

綱目ニ鸂鶒形大于鴛鴦といひしハ誤なることをいへり。按るに鴛鴦の色を見るに世にいふところは如
花鴦に等しは形小さく野鴨と見えたり。鼻水に近き
涇へうすけなる者は上方に附はすれさる後
の人ち雌雄未嘗相離と寄するより雌雄（シシ）の音に
りてよびしなる成し

鸕

鸕鷀ウ大己貴神出雲国多藝志之小濱ニして
建御雷神を饗せし時櫛八玉神鵜
と化りしといふ事古事記古月記
みえ又彦波瀲武の生れませし時

錦綾とりて鹿屋を葺しと四月記日本紀
にみえしを古事記には錦ノ綾と書給へ
錦みえ三成をいりて太田戯錦日本紀私記に
といふこと二ツトリに當錦綾綾にみえと定より
けれとも取りてしと紀にはまたるの絵二ツ
トリといふ字を綾ヘウといふよしを
上世よりいひ伝へしゆへウとしれといふなれ

にてツトリと云ことハ神武天皇の御歌にウと
いふ月のことはいでむかしの御詞にしと侍ふ
はこと名とおりしとみえありにてツトリ
とはことあるに播めるをいふ万葉集
おもとみてしれとウといふ義ハ与詳
ウとは浮と義あるに似たり神武の御歌にてツ
トリと読こひしをわ句にウとのこるましかすつき
あなんの初詞とされハ日本紀新記にし歌読詩く後
読せとはいひたりきこへてそもあなの御歌小野と

のこまいおすつさへあまよ白よツキツトリと
諺にのこしけるのこし鴨の名をツキツトリと
いひしは中つねと鴨をはとてツトリといへ半に
ありてきこえたる鴨をとてツトリといはれたると
らとふなていふこともあやしとおもへり支那に
小田鶉雛の説にもつらへられたる詩曹風にみえし
鶉ハ陸璣疏には鶉形雛前極大而也人隊
直前廣鋭下胡大如斗書と見て示雜有鶉錦
鶉とみえて郭璞注には叫る鶉雛のことへ
あり又あれもしおもしろしとて皆人大
みすていふくあいまりあ魚とも殊にましく
ありてみり陸璣疏不足云ふものとく極めてたかく
名の鶉鶉の鶉には何人でしるあすたす紀にもその鶉字
諺てらといひしにて紀に云字借用ひしのとして

正訓にはあらじ

鶴

ツル 倭名鈔曰孝字苑と以て鶴はツル
似鵠長喙高脚者之揚氏抄一訓にタヅと
いふ本抄俗謂鶴為葦鶴是也と注せり
ツルといひタヅといふ義並に詳 万葉集 説小露録
説てツルムラといへりツルといひツラといふは群飛之
ツルとは其声に出たり 鵝別ありや いかがあらむ 一訓
にはタヅとは田鶴と書たるを甲田不相皆
といふやあらん

又一種青黄色のもの緑青云ふ 露なり
いふあり 此緑青の形状ハ一種に白緑と
いひけり 本草綱目 上古に緑青并青廣で
いひし 緑青なくして白緑をもていひし
も古今ひしけれは今銅緑を銅緑と見し
その字を小板に並る銅緑といひし岩崖大抵よ
今緑といひしそのまて古人用ゐし不

嘗し然して始てさへ知ぬものとふ

扨古事記日本紀なとに鵠見えて

クヾヒといへりさて後代に漢字いまだ備ら

ずは此鵠の名に詳ならず徒に白鳥の字

音をもてハクテウといへり漢の俗に天

鵝といふ是なりクヾヒとはクヾハ是帰鳥すて

多ひよひし證お原にみえたり　是に似たり　ヒと云ふ古の俗

されど詳ならずとぞしるし

鸛

シホトリ倭名抄に本草をひきて鸛はシホトリ水鳥似鵠而巣樹者也とありシホトリとは大鳥也即今俗にコフツルともコフノトリともいふ也鵠に似たるもの類ふ

鶴し

鵝

ガ倭名鈔小兼名苑を引て鵝音我形似雁人家所畜之と注して此外にて

まふ爾乃名を須もろく雄略天皇の御代
に身狭村主（ムサノスクリ）青人呉国に使して送る
時に二鵝を帯来りけるにして犬の為
に嚙れて死しし事日本紀にみえ両鵝
は論てヰホガイといふとみてはと云代の
およし尓とは見ても郎の係りタウガこ
とふ事唐房之は鳳凰孔雀鸚鵡等

のしく紙も安置す事をもてなしとみえ

あやし

鵲

カサヽキ推古天皇乃御時より難波吉士磐

金新羅より到りて鵲二隻を献ぬ

難波の杜(モリ)に養はしむ、因巣枝而産子

とありとみえたり　日本記

是神の鵲来

是より東乃始也カサヽキとは新羅の方

言とは玉の声言しと海となれしを
あつまり即呼し転訛の声言り語を
まひてカミとふをカサとつゐカミと云ふは特
謂之サギは即噪（サワキ）之語噪きわれは鷺なり
すて漢人の謂ふ処なり
春鳥ウグヒス 倭名鈔に陸詞切韻を引て明之は
春鳥之漢語なり春鳥子ウクヒスといふと見

あり百家ふ案本書譜てラクヒスと
いひしを楊氏の説ふ依あらすしラク
ヒスとふ義しら譯営といふ物は以
海舶ふ載来れる黄書をふらその称ふラク
ヒスといふ物ゑゆへれ営の字譜てラクヒス
とよすれいまもある
出とよみれ百家ふ案の中にも営語てラクヒス
といひし見えれいふ国来る示語ふ久しきの
見えけり楊氏書の説れ誤しと捜といひ
営譜てラクヒスとよすれまてふ付との方これ
まくおすしつと書の字も又萬葉集の上

ことハ古より詳ならすと
見えたり
杜鵑ホトヽキス倭名鈔ニ廣韻を引て鷤鴂は
ホトヽキス今ハ郭公とかけりホトヽキスとは
鷤鴂の帰夢くと十王経にみえたり倭名鈔
にみえし和のことハ神武の中世よりいひ
つたへし和よりしるされと鷤鴂
郭公をとて是一如まとあやしき二字をホトヽ

ギスといふものとみえたり杜鵑のことは本朝に
いひ伝へし所と漢土にいひ伝へし所と相合
へる事あり杜鵑子規等の字は古人
ともに用ひし所とこそみえたれ　蜀王望帝杜家は
ましく杜鵑狀如雀鷂而色慘黒赤口
鳴夜啼達旦至夏尤甚其声哀切其鳴苗
而鳴帰去田家涙之江見花半而雉鳩春化
栄生子冬月則藏蟄とみへしこれ其形相似て
云帰声也亦相似り然り而て卵は鷽に托して又云
ことはいよ〳〵帰達旦まり其の同ものなく

巫名は日本紀に見えてミトヽいふと見え
られたり古語拾遺に昔神代に大地主
神乃田植のころに牛肉を食はせしと片巫志て占
へしめられしといふ事ありて片
巫はミトヽノトリと訓したり肱巫
ひて片巫といひ亦巫名と志るしてミトヽ
といひしはかすかに義ありぬべけれど

弟をすては闕けぬあまりいふべからし
字なりとても鶴の字に限り用ひしことゝ須
ましての音にかへしてもかはらずカタカウ
ナキといひしことゝいふ義並不詳なれは
西字の原字よりは鶴雀属字ち雅同鶴与鶴与鶴亦
同鶴鶴如き鳥とて見えたりさらは鶴りいふことゝ鶴ときふ
その名えしもしかのみにかれを詠人の語なる葛飾はアシ
ミトこにいふをのくとらふなりシトゝは京俗にアシミと
いふものこれ
なり

鵤

ヒメ　倭名鈔ニ陸詞切韻を引て鵤ハ白喙鳥也
漢語抄ニヒメと云ふとあり伊勢小凡也
記のよふ小島本天皇と申す小御國
還り水よ挙しましまし太敵ヶ有楼ニ居
来於呉桀上鵤ニ比米鳥とかけり枝柴
穂草の花賜やとよふよしみつあり　ヒ記せし
所まことの鵤と呼て詠とへしよ侍り

獦

獦子鳥アトリ 倭名鈔ニ雑要之所ニして
𪃹䳕名アトリ 一川ニ以ふ 胡雀 漢語抄ニ
獦子鳥 和名上ニ同し 本朝説ニ云 未
詳 但古郵回史用獦子鳥名武説無之詳
然如到章満山林故名獦子鳥と云ふ
アトリと以ふ氣も清用ひし所の字也
てらにも並字ニ詳 𪃹䳕獦子音近くし
て𪃹䳕ハ蠟嘴𪃹の字

舎理の文しと云釋銘解のこれハ爾雅ハより
て印字海篇の執多の草なとによりて
ヒハリとよふものゝはあれは悪地を鳥女婁
女そ土の證りヒハリは天に翔と旋
のをとりはあまりみつれとも哉を
のこれハ云釋　漢人の説に云圓林常
　　　　　　　龍縣志にもて嘆天氣
昔とそ子そのはヒハリやヒハリとは日暖にけ暖れあ程
而得して中縄す暮とこつくといふ糸る昭

啄木

一名鴷ケラツヽキ好食樹中蠹者也
なりテラツヽキ此等の鮮ならず今キツヽキ
といふものなし　テラツヽキといふは物部
守屋大連殺され死して後鳥と
なりて仏寺を障りしとぞしかれども鳥と
いふく樹の俗蛐蜒を捉来ることなりも猶ありけるとぞ
是あり東西の俗やさけ地はケラツヽキとよみケラ
とは俗に云ふケラなるといひて表面の虫を総べて
なりて蛛蛛のこといひし法のことのこともあるを
その木蠹を啄みありといひてケラツヽキといひし法の
略してテラツヽキといひしなりケといふをテといふは
是訛言聞也

蝙蝠カハホリ倭名抄に和名をかして蝙蝠一名
伏翼カハホリと記せり美ニ洋 カハホリとは蛇醫とヰモ
りといひ字書をマモリとよふかことし カハモリとかく
今時俗にカワモリとよふ也くホリといひモリといふは
以語く此和名は何事の石公様下ゆふに仮むるの
なりされハかくいひしも訓への流行ほと転りぬるを
いまとといへりいふふきもりかや
ありくる

鷲ワシ高龜命孫天日鷲翔矢命とて碑あり
此名 姓氏録 まへに 大巳貴神天羽車大鷲

かやうにしるしいふものも見へ侍り
即ちこれまゝ駿河に凡ち記まと見ゆ さしは
鷲といふものゝさうりく
けるとはその盤飛ことの車輪のごとくなるを
いふめりしも其乃詳なるをしらす 一説
名物かて唐韻乃鴉大鵰くとみえて
鵰を読てシホワミといひ山海経の鷲小
鵰之といへりて鷲を読てコワミといへり

何なり萬葉集抄にハえびすハ鷲の羽状
夷の羽をいふとみえたりされは東方の
方言にハニトリといひし前羽ニハニトリハと
いふなれはこそ雕メ東方の俗にありしまゝ倭
名抄ニ云鵰と訓て角鷹はクマタカ今
按本草綱目角鷹と角ある鷲と同しより
陸佃云其頂有毛角故謂ニ之角鷹一

頂有毛角といへり雉子を鷹も有二三角

曰角鷹二字をみえしこしられけるにクマタカ

といふ和名すらもみへねば倭名抄にも

角鷹読てクマタカとよめるは未詳と

いひしにあへしクマタカといふ和名も見ゆ

是鵰訓みして古よりへし鷹といひ隼といふ

かのことわざにして別種なることなかり

これハ古ハ熊鷲といひしを なの代り
鷲を呼ひてタカとも呼ひてクマタカ
とはいひしにクマといひしハ熊鷲
なといひしすのごとくにも猛鷙なるか
最強のものとみえて（熊鷹は白虫紀行見由）
鷹タカ 仁徳天皇紀に依網屯倉［ヨサミノミヤケ］阿弭古
まいりて捕へし異鳥を網して

就中しも百済王の孫酒君と云ものは
しも此程多く百済よりわたりて此能
人に従ひまゐて捉飼て詠をと撫む従伴
て鷹飼といふて委すべき人の證なく　今これ　ことに
此鷹を従鷹にこそといふて此国にしても其
の事云ひしめすあるまじかくのことし
斜酒君に捉けて成らしめしかば　ごとく
此者は流して則ぬ鷹の草紙とあらけたまひ

尾は少し短く黒けれ腕よりも似て居て鋭(スルド)く
け日百舌(ノモズ)を擒しめて数十雛を
獲てぞりさうに似て鶉鵰叡(?)
空にとびめぐりて纏(?)名をば麿和
兼る花おを以て鷹隠てタカといひ猛(?)
黄鷹をはカタカといひ撫鷹をカタカへり
といひ白者ハ論雌雄皆之ヲタカといひ

大者を白と論せん昔セウといふ漢語抄
よい雉と兄鷹とし雌を大鷹といふ
まい漢語抄よ鷂はハシタカ兄鷂はコノ
リといひ鶻鶻をノセといひ鶻鶻をツブリ
といひ雀鷂ここタカともツミともいひ雀
鵙をエツサイといひてしらり無に名詳
又抑漢語よタカはここさへのすゑをいふといへ
ここにここは前に用ひられたる者の

申し御妹に雌鳥王と申すおはしまし
き雌鳥王の御歌に云ゆへや隼別と
読まれし二首ぞ古事記日本紀には
隼別王の舎人に隼は天に翔り飛翔
とふ歌よみしとありさるは隼とふ
名は此王の御名をいまださとし
時より長代はへりけるしハヤフサと

いふ気のとなへハ有の理ハヤブサはあすなはち
速総とあてたりさらハ
なれハヤブサといふことなるべし然らば速(ハヤ)くトブサ
は翔りハサといふ語の略なるべし
鶯鳥の称トリといふ古語ハ飛ましトラの
こもいひしうはそのりとをいひしハ詞助くと
ありきくされ気翔をトフといひ捷疾をトし
といふなれ語釈なりていひし而
あるか又ハ捷くして気めれとなる

いふ名のありけるや　尺といふは釋名に
半と云ふ事なれは　即ち雅言の方言は
こゝり讀て千こゝといふ也
さしあるをトといふこゝろ也　此は似たれ
とうたしは縄の方言にもあれども字を讀むに
の音にて此のこゝろのあしきに似たる　漢名あるは
それからともゆへなれ
かくし尺のことは縄讀てヒロトリといふ
緒讀てこれといふことは字音なり
ありてよろしく尺は　紀貫之

月三とせし頃とコフといふかしこにしはしもまて
きれ音ふみつかりに陰陽師
の解すへしと考へ幾月ゆかしさの
おもひにはすれにはすれにまたのなしに萬秋
しはつきのそのとはらまほしぬ

己上　翁鳥

法文深理を通釈しのうしるゝ人は
駒はよみくこことくる月をその儘に書も
也古来説ありて左の理をて序々これにかよはし
てはるともはゝ駒をもいひしなりても山てもとの心ぞ
に譯ミてとは郡小馬也
ミ雑原めも　駒をまかなへしとてまゝり　百歴
まりさ紙はゝ出へまりしるいくさくまめり

りれハめてしき米かるりのけさくウて
とは春時にハケハウニハモノと有いへる
あれ也秦氏の先祖まて要わりけるとて
みそとこ人をいみしき事の心をもせるなり
ウてといふ也とふ月念りに嫁くいニ庵山と
いふ事ふ親ちて紹しめのひろさといふす
おもふよりそし付従のおもて紙をむけそ

秘事乃ことハ又のとき秘事ハ人伝ふ以
百敷乃月其中し候 婚是之銘し也
子孫ならでハ容易き人の志る所也 不知
是ハ必ずしも伝へし不知あり或ハ秘密の
神よりつたはりてきたるもの也 今乃世俗
守りの事のあとて小きものハ小しき物也し
小人の心にはかる色の世俗追てハ百敷のもの

言葉のうへを替らしよ娘付まへ
ゆるしウ云とハ太鳥の習中ろの習ふハ云ん
らむ太古とゆめハ勤仕て色ノ舞場色ノ楽極
難きひとて四季折ゝの出入候
これまてハしもてとふるハ難くてよし
あしゑしつゝしを母の供ふさかりよ
難くてさとり世ゝの日ゝそのとこてすと

いとゞ割ハ一色も錦も和遊まつなふ
僧と何りしを志ん人の法度有は意補天
皇居御代々百餘之遣ニ泥の蟲ニ負ニ返る二王
即説咒悟頂礼同ニ阿尊敬合掌頂敬
云蔵楞伽円顔仏とそへられみなを
ぢの小せきせ方ひて守てといひしと嬉しき
定まりとありまゐらせば去處不凡哉とて

ひいめすすらはうてといぬすけりもの
可森葺朮男神可多み女男可多み女多と
いふらみきうはし馬のおとなしきこ材と
ほめきしてうてとはおけしかれしおすも
或は御さ可勝主賣よらしもよ能くの
抑そとあけし胡地よ出し而のその也しは
うてとうつけしはしてと御こころへしれ

相るの事廣音ゆゑはじめれいとふ
御し口むしり西洋の人の書物ころを
絵ことしるのこうふのうけさうなと
名の新なも紙にうて漢文の如くしてんかね
てふ物はいろは唱英語人イキリスを
何ハしハあろハ此[illegible]けれはありそのふ
あらすちかの人ゆきかふ本西南洋の地方

凡百年餘をへたり已に久し斯亜の書殆

のこさず法度乃その趣は緇素をいはず

雅俗の雅をえらばず皆録しこれをおさむ

とひかりに清紫女中に選(ニャム)國の主年

あまた練して秘法乃編しむ事をおはひ

し書籍通を求に閑ひて唱葉他人

の宗風を申しまなぶとありしかはなはだ

つねにふくをしけると芸州家来はそのこ

小智にくはのこはゞ之候にほかはこゝ

遠ざかり給へ又家来も人のおもひかけ

あへて来也とおもひてことに小河へ出

浄名おもて名経説文如来出門まてある

ムて牝馬一疋騂をとて牡馬一疋駿をあて

ムニ驢はウサギムニ駒をコニ駱駝はジウクダノムニ

と唐よりウカキムベとは其の事也まき完の
たゝめるにいくラクダは素字書とて
よしいしや
儒者抔にもこれを牛之と押彰切り
あるいはの字を米啄れは始也次
午ウシ
前西洋牛乃いと紀と太古耐ふとに
崇一て来るの唐小ころをりて法と素称ふ
急須はよしいしていふて全いふものふとくゆは
あるさ也し錢湯の中よ有ゝく今北条物果

コウヒ海ニ立風ヲ持年多ク大牛也俗ハコトヒと
いふ乳牛ハチウヒ牸牛子ヽ名也と注せり
コトヒの義ハ未
詳ならず

犬

ヱヌ 倭名抄ニ爾雅集注を引て狗ハヱヌ
是也又同しと注せりヱヌ亦訓してイヌと云ひ
也義未詳火闌降命乃苗裔諸隼
人等天皇宮墻ニ侍て吠狗して代

ふて筆を用ゐるをやといへり　唐筆に
日本にはありみ也おもしは王ヌといイヌと
いふはこの家書物をいれしときくなり　イへと　不然を
門後にハ唄いぬれを王ニ入也
又ふるに調物ありて也　唐に唐顔は
して　機ムクケイヌ　深毛おやと深しきり
今と繞イ細毛
とは　ムクゲレ云也
横子コて　係名ある野王が説をかりて　横子コて細毛

而小姓補嵐と申まり子とは嵐子也ここは
こてとハ久しとうかゞひ待御ふり嵐の前へ
下りけるハしや印ゐ給子ことみはせ
御の前まゐりて

嵐子ハこ華や洋大臣常陸守義高様の御
まへ根望例ゐかゝねりのしるしを天錦
満と大路の中に射入てさ矢を捧しめて

すれてちは出をともそてハ毛羽を廻りし縄のひま
氣あり?へましもしまにとまなど鶴房
して洩入さひし京ふ出ふ纒ふゆけりとふ
串四年五月のみえて縁足跡を四
聲字花乃氣よ宮店ふ新也とふ泊り
ろりさしは子ざことなは子ま根宮
洲をすとりふうこく逃注し着とかすむ

栖や荒居とよばれしなるべし

古語ニ子といひし幽玄之義何也寧ふ水狐

とも子ともいへども寝ともいへども眠とも子

これも子ならぬ無れ時也或人の説に子ども

とは又子どもといへる将語也といふべし大体の世なるべし

すべて荒寝といふもふもあるべしとふも

又又ともいふ語を新にいりくいりて

いひしハあやまれり
鼯鼠をアヽツチ子ステといふハ誤也今謂く
耳以鼠とらへしにまかへく鼫鼠とウコロモ
千といひ鼬鼠をイタチといひ鼯鼠を
モミともムサヽビともいへる也並に異詳な
らん
ウコロモチといへるハ鼯也とはめつら附会なれ

擴説しはよりていふしかるに應し
ハしらウコロとは春秋錦の謂にてモチ
とは櫻樹すなとは如何セイタチとは如義
詳ならず古之説ハ千夕千ハ及說
ほらぬゆ能さるのよしこ將乘ゑく
ならぬ以下也こなけれバ乃説古證不出るなり
以上の例にぬ成せと何ぬの出れともこ今を

守はモミえ京ふれ語しは物とモヽグハ
とらぬやモヽとはモヽの特種と守ゆれと
多の前を洋ぬれ梁書ニ禰出小山氣
あるらく古如年又有大蛇能呑ムて
いふ月の見えしは洲ぬはそれしのす
かあるゆとを河し出鍋嘆之訛ぬまて
あるなき

鹿シカ 倭名鈔に爾雅集注にいはく鹿之加

牡鹿曰麚 日本紀私記にサヲシカといふ

牝鹿曰麀(鹿) メカ 其子曰麛 カコといふ是

せり日本紀イにも康頼てにしかと云

海にも牡鹿とみへしをは古事記

みちにも男鹿をさをしかとより鹿をかといひ

きこえたりまことに嫌也とみへしは

古今は牡丹をいひしとぞ

見へてあるかといひしかといふ無常の解　纂疏　小天理

聞えしかなと一説に廉名といふとおほせけり

起りて鹿韭と云　古人鹿韭牡丹なといひし

に京保く理格といふ事也　なりと云理格

といひしを別になきものあなりとて菊弁不聞れ

しけるにこそ云る説にし

有しかるへし　又僧名称に牡丹音義

に雑俎等に見へて　鹿韭一名鼠姑とか

といひしを此国に者なき事のとしもつる

シジカとは似鹿而黄黒色なる獣にて
しとみえたり麞字或作獐カこと
いへしいふ云雨地宮曲せるはいふなりと
古語にクといへるは思ふやカてといへは
云雨の曲にも又半川瑠に似たるといふ言
侮しこゝとは万葉集にこゝクこ口とみ
事を似鹿といふは鹿に乳集にも見れ

しかは海をへたてゝいはゆる頸羊とかいふこと
なし海には能行鹿猟かくしきはまかる益
まこと国のまゐすかをとしてしひしぬかなへし
海は赤頸鹿をいふ葦鹿はアシカ陸奥
出羽交易雑物中に見え西かまた水豹とかいひ
しを左思呉都賦にみえし海鹿異物
志にみえたりし鹿菜のまた若和鹿のこと

水の海岸蘆葦之間にあそびけしや
すみたるにも海獺といひしものあり
なり
葦鹿といふものは海中に有るものなり
海にも西國海中にもとれる出雲国
土佐に葦鹿、杉葦鹿、海にありとなり
海獺を捕るものは頭より皮を剥ぎ似たる 三 梅

幅一尺も似獺大さ廿三寸ともいへり年

水気氏にアシカは海獺也といふと

いふなり海猫是すなはち海獺の人

なりといふは誤也東海海中にありと記

なれ無り

野猫井添見るに大きさ獺のことく野猫ほと年

井すき海と兼見花方に見ゆるといへり

桃一名日桃一名承ハ井縣又作桃承子也と
須ありて四年ちかまでに書八十巻を
前太閤五部を觀さしとして須磨にて年
南山院に本桃ありとして出されて桃ハ
似るべし太石鉢に詰て待居らしに年
みへ古酒猶貴しのは太?之部の田暗のあ
まい桃換せしを汗巫カタフチギ 脱巫ヒチフキ して古はしめ

白猿白毫白銀をかけて御室社ニ歌れ
とみつて猿爲ニ讀く井といへ海し古詩
古歌みて井と讀ミしむゆく猿の
事わしく經ニと井ノ之ナるいひて家
猿とはフ夕とろあり狩猿をクサナきと
いひ來猿を井といへしある事ニ詳
熊久一傳兔耳陸詞切韻ニ熊集法ニ代

引て絹さりて熟し紙悪而小者悪を
ミクて紙絹而黄白也と同しなりクてとよ
并不詳百餘の苗らへ絹とゆりてとる
公り今誰しも紀もの鮮の紹絹綾紵ニ本
古コムとも麻クて乃音北綿も紙紙
世本は久てとも本理紗してコてとも本木
とくやとらへ名也

右左傍線を略してカことくに字音して
クてとよみしハ字に従ひ無の出来しよめ
梵語をよみてクてとよみし書紀大也と
イカヅチとよみてをよみしてこゝへり
無解 無礙 無盡蔵に 猶をよみて 撥
梵をコニイヌとよみしかれど海に出来たり
世界中古来日本紀篇に見えし無の字皆

芸術の名をきゝしりしともみへ候はず
備りて論てかてとりしくしと
あまりり侍らし百段の乃云洲ふ同しき
事ともかりしと年乃報しき年もを
一名似と四年五年日本紀本傳らに姓氏
録まえへし不躬羅の史籍本紀ふ及ふ
まへし而も上古を時より付人彼人申さふ

事の有しいらしと思ふ也川いふて
かしこれ方云を出してお侍りけむ經
しむへきとあし須然の字此をき波此の
方云同しかうのゆはえとへい百殊の此たまよ
然川とみへしは クニカム といひし月白出
記秘訓とこえり卿今のと野録此俗然川
鋼鍛て コムカイ といふその コムガイ といふ

百脉のはまくさかしとなへし者の物し
其葉亦しく羅つとしてとなへるの然るに似て
黄白色の花さくや古説ニ白黒之花といへ
しかれは花の色によること有

粮

粮ハ禾カニ茎ヲ詳ニ縁ス名称ニ説文ヲ引テ粮
穂ハ禾カニ似テ而鋭頭ニ類スルやと見
しるなり

狼をソホカミといひしを代々継とくこと云
つれとくに蛇の最へきことといひしまゝにしく
雄畧天皇紀七年ニ三諸山の蛇を神としいひ甚後
出風土記ニ出入部珠瓊御乃象形蛇を
ツガミといひしもいく神はいつヽホカミ
とは大神之御ことおの鹿は訓ふみてとく
太古の世まて天班駒と申しゝのとけ猫の

事とて是てこれらの毛色の斑駮小
して黒ゝまれ黒へりらもブチゴニと
はいへしるべし和俗ミケコニ云
いへし事あるへしとかりなきもと
叫ら事なといぬしへよりいひと傳つたる
かれをいふ也あるへき哉

狐

キツ子 倭名抄 考聲切韻云狐者

キツ子　狐名射干也　関中呼為二野干一語訛也と
いへり　キツ子は義ニ詳　世俗にも狐と呼て
野干と半ある不知しといへり　俗には貉を
ウミナともムジナともいへり　狸をタヌキともタヽ
ケともいへり　猫をことゝのふことゝ紀し無不ニ詳
キツ子とは　キは黄色也　五音義をすつゝきとふるや
ツは詞助　子は父の称也　又ハ大也

獺　ヲソ　義ニ詳　俗名猫イ　兼名苑ニ川ニ中

獺ヲソ水獣恒居水中食魚者也と注せし
は即今俗にカハウソといふ是れはカハヲソと
云ふ即水獺也海獺に對していふ也
古語にヲヌといひしは可畏也畏懼とヲソ
れといひし即畏也ヲヌといひウヌといひ
ヲソといふ並に語の轉したる也此獣の能く
つきまとふ物なりといひしもさもあり哉

説文に猨（イウハ）東戎ウツといふは此字の事よ
見えたり猿の字ありこれ去しともいふ
これよりは説猨東戎ウツといふは胡の字
は漢音ともてなひしく

猨

サル猿也猨字亦作猿一名ハ猢猻
唐韻に云猢猻は漢語也胡孫とも書
但サル義ニ詳

サルといふは其性躁動害物と
いふ義也去るといふサルといふ

蹂の義あり牛馬の蹄れ深ふこつりしもれ也を
濃物し陶し古語ニヒラといひしを梵字摩訶呼ひ
しとらへ
なり

虎

トラ義ふ詳虎部にいへれ此生乃獣ふあ
雁を銀をテニといひ黒銀をフルといひ
氷銀をアザラシといひ羊をヒツジといふ
今山に化並に海氷乃方言知しとらへ
かし出

今俗に貂皮をトンビといふは豹皮の名と
混しめて蝦夷の方言なりといへり
水豹は山東通志に記すところ在海中若犬
如豹文身物ありの小獺なり和人東蝦夷なと
云より二名遼東女直地方乃海貛はアザラ
シといひ今はトヽとよぶものやといふへし
併しハ陸續院の象戯一名は象棋と

いふしるしの印なり

豹

ナカツカミ又云澤塲家ナ豹尾神あり

其位中宮ナあり其之ナ位之豹をまもく

中律神とこひしに似て其の豹は尾をまもる

とまらひ入之の字未ハ陶弘景が説成こそ見之

犀

サイ説文に犀音西此音枇と延せり

此時柳子新解轄の也こらしも京に資也業

きはまりなしや

象キサ　象は西南夷の獣也古の用也ナリ
ありけりしかとつとき象を見してキサと
いひしをこゝよりて後に獣名のことく
聞えしと見えたり倭名抄に木部に
唐韻を引て樣は木文也漢語抄にキサ
とある國語にキサは蚶之和名にして木文與ニ蚶

貝文相似故名之とそいへりと
なかに凡て龍の文あることのしるしく
きせとりたるもの也龍のひしきさし侍ること
形の文あるによりて此名あること
古の絵ふ衣類とは色麁物色弐布龍
ともいへり鑞ハタノ広龍鰭棲サ色也
此事わりしは、衣の麁太なり葉

麒麟なといふは海に走獣の

たくひをもはいつれも性の兼様なると

象州なるにも成りそかしいひしかも今を

志らぬへつ次後にケモノといひしを即是

毛象（カラモノニコモノ）象なといへるにもありけり也

こへたる條光なる事しる人のある

麒麟といふ事もあるとは見えけれとも

已上麒麟獣

H+K 2
GretagMacbeth™ ColorChecker Color Rendition Chart
15.01.2002